
熊 谷 市

在家遺跡

フレッシュタウンかごはら関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



在家遺跡全景（東から）



在家遺跡全景（南から）

序

埼玉県では、環境優先・生活重視、埼玉の新しいく
にづくりを基本理念として、豊かな彩のくにづくりを
推進するため、種々の施策に取り組んでおります。

総合的な住宅・土地対策の推進施策は、快適で潤い
のある生活空間の形成を目的として、質の高い住まい
づくりと住環境の整備が図られております。

このたび、熊谷市玉井地区に建設することになりま
した「フレッシュタウンかごはら」は、良質な住宅の
供給により、生活の安定と県民の居住水準の改善を図
るために計画されたものです。

「フレッシュタウンかごはら」建設予定地には、以
前より古墳時代後期の古墳群の所在する在家遺跡が確
認されておりました。これら貴重な埋蔵文化財の取扱
いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまい
りました。

その結果、どうしても避けることのできない遺跡に
ついては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調
整により、埼玉県住宅供給公社の委託を受けて、当事
業団が発掘調査を行い、記録保存の処置をとることにな
りました。

在家遺跡が所在する熊谷市は、中世の坂東武者、熊
谷次郎直実の本貫地として著名であります。埋蔵文化

財に関しては、西別府祭儀遺跡、奈良時代初期の瓦を
出土する西別府院寺をはじめ、学術上重要な遺跡が数
多く知られる地域でもあります。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の住居跡や掘立柱
建物跡、中世の掘立柱建物跡や井戸跡などが発見され、
古代から中世にかけて、この地が生活の舞台として頻
繁に利用されていたことがわかりました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋
蔵文化財の保護、学術研究や教育・普及の資料として
広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至
るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局
生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅供給公
社、熊谷市教育委員会ならびに地元関係者各位に厚く
お礼申し上げます。

平成10年5月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 荒 井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県熊谷市玉井3丁目に所在する在家の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
在家遺跡 (TMIZIK)
熊谷市玉井三丁目54番地他
平成6年6月24日付教文第2-51号
3. 発掘調査は、「フレッシュタウンがこはら」建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅供給公社の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、それぞれI章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、山本靖・富田和夫が担当し、平成6年4月1日から平成6年5月31日まで実施した。整理報告書作成事業は富田が担当し、平成10年4月1日から平成10年5月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は、株式会社朝日テクノに委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、山本・富田が行い、遺物の写真撮影は富田が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は石塚 香の協力を得て富田が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課、それ以外を富田が行った。
8. 黒書土器の訳読は宮瀧交二氏の協力を得た。
9. 本書の編集は富田があたった。
10. 本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示・ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
金子正之・榎田宣行・寺下博・菅谷浩之・鈴木敏昭・島羽政之・吉野 健・松田 哲・宮瀧交二・宮昌之
熊谷市教育委員会

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SJ…住居跡 SB…掘立柱建物跡
SK…土塋 SE…井戸跡
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。
遺構全測図 1/200 竪穴住居跡 1/60
掘立柱建物跡 1/60 土塋 1/60
井戸跡 1/60 ピット群 1/60
5. 遺構図中の斜線スクリーン・トーンは地山を示す。
6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。
土器 1/4 鉄器 1/3 石器 1/3

7. 遺物観察表の法量は推定値を括弧付けて示した。
8. 出土土器の胎土は、含有砂粒鉱物を肉眼観察したもので、遺物観察表にはA-白色粒子、B-角閃石、C-石英、D-雲母、E-長石、F-赤色粒子、針-白色針状物質、片-片岩の略号で示した。対象土器の特徴的な含有物を示したもので、含有鉱物全てを記載したものではない。
9. 出土土器・陶磁器の焼成は良好・普通・不良に区分した。
10. 残存率は図示した部分に対するものを5%刻みで示した。したがって必ずしも全体に占めるパーセンテージを示してはいない。
11. 備考欄には注記No、出土位置、備考の順に記載した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 掘立柱建物跡	18
1. 調査に至る経過	1	(3) 土壌	20
2. 発掘調査・報告書作成の経過	1	(4) 表採遺物	21
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	2. 中世	22
II 遺跡の立地と環境	3	(1) 掘立柱建物跡	22
III 遺跡の概要	8	(2) 井戸跡	24
1. 調査の方法	8	(3) ビット群	24
2. 検出された遺構と遺物	8	V 調査のまとめ	26
IV 遺構と遺物	10	1. 在家遺跡の土器様相	26
1. 奈良・平安時代	10	2. 器種組成と出土量	27
(1) 竪穴住居跡	10	3. 須恵器の供給について	28

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第13図 第2号掘立柱建物跡	19
第2図 周辺の主要遺跡(1/50,000)	4	第14図 第2号掘立柱建物跡出土遺物	20
第3図 調査区周辺の地形(1/5,000)	6	第15図 第1～3号土壌	21
第4図 在家遺跡全測図(1/200)	9	第16図 第2・3号土壌・表採出土遺物	21
第5図 第1号住居跡	11	第17図 第3号掘立柱建物跡	22
第6図 第1号住居跡出土遺物(1)	12	第18図 第4号掘立柱建物跡	23
第7図 第1号住居跡出土遺物(2)	13	第19図 第5号掘立柱建物跡	24
第8図 第2号住居跡	14	第20図 第1号井戸跡	24
第9図 第2号住居跡出土遺物	14	第21図 第1号ビット群	25
第10図 第3号住居跡	15	第22図 在家遺跡出土土器器種構成	27
第11図 第3号住居跡出土遺物	16	第23図 8世紀後半における周辺遺跡の器種構成	28
第12図 第1号掘立柱建物跡	18	第24図 周辺遺跡出土末野・南比企産須恵器集成	29

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	……………13	第4表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	……………20
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	……………14	第5表	第2・3号土壇、表採出土遺物観察表	…21
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	……………17			

図 版 目 次

図版1	遺跡全景(北東より)			第2号住居跡
	遺跡全景(南東より)		図版5	第3号住居跡
図版2	遺跡全景(北東より)			第3号住居跡遺物出土状況
	遺跡全景(南西より)			第3号住居跡遺物出土状況
	遺跡全景(北西より)		図版6	第3号住居跡遺物出土状況
図版3	第1号住居跡			第1号掘立柱建物跡
	第1号住居跡遺物出土状況			第1号井戸跡
	第1号住居跡遺物出土状況		図版7	住居跡出土遺物(1)
図版4	第1号住居跡カマド		図版8	住居跡出土遺物(2)
	第1号住居跡カマド断面		図版9	住居跡出土遺物(3)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくりに」を基本理念として、豊かな彩の国づくりに推進するため、種々の施策を講じている。

住環境の問題では、快適で潤いのある生活空間の形成を目的として、質の高い住まいづくりと住空間の整備を推進してきた。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした開発事業と文化財の保護について、関係部局と事前協議を重ねてきたところである。

平成5年3月26日付け埼玉公企40-2号で、埼玉県住宅供給公社理事長から県教育長あて、熊谷市大字玉井に建設予定の「フレッシュタウンこはら」事業について埋蔵文化財の所在について照会があった。それに対して県教育委員会は、平成5年6月28日付け教文第26号で、予定地には在家遺跡が所在し、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通

知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施するよう回答した。

その後、県住宅供給公社と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、県住宅供給公社・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画、調査機関などについて協議し、平成6年4月1日～5月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

平成6年6月24日付け 教文第2-51号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

在家遺跡の調査は、平成6年4月1日から平成6年5月31日まで行った。調査面積は848㎡である。在家遺跡における発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

平成6年4月、文化財保護課、住宅供給公社担当者と調査工程の打ち合わせを実施し、引き続き重機による表土掘削を開始した。現地表面から遺構確認面であるローム層までの深さは1～1.6mにも及び、表土掘削は難航した。また、調査区内には土取りによるものと思われる大きな擾乱が存在し、遺構が削平されていることも確認された。

表土掘削終了後、補助員を導入し、人力による遺構確認作業を開始した。竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡、井戸跡等を検出し、順次発掘を開始した。

平成6年5月、遺構の掘り下げを終了し、写真撮影、

遺物の取り上げ、測量を必要に応じて実施した。最後に全景写真撮影を行い、在家遺跡の調査を全て終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成10年4月1日から平成10年5月31日まで実施した。

4月、遺物の接合・復元・実測を行った。遺物の実測と並行して、遺構図面の整理、遺物写真撮影、遺構・遺物図面のトレース、遺構図・遺物図版組みを行った。5月、割付、原稿執筆を行い、5月下旬に印刷業者を決定した。

6～7月校正を経て本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成6年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	枋原 嗣雄
常務理事兼 管理部長	加藤 敏昭
理事兼調査部長	小川 良祐

管理部

庶務課長	及川 孝之
主査	市川 有三
主事	長滝 美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主事	福田 昭美
主事	腰塚 雄二

調査部

調査部副部長	高橋 一夫
調査第一課長	坂野 和信
主任調査員	富田 和夫
調査員	山本 靖

(2) 整理事業（平成10年度）

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼 管理部長	鈴木 進

管理部

庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二
専門調査員兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久

資料部

資料部長	増田 逸朗
主幹兼 資料部副部長	小久保 徹
専門調査員兼 資料整理第一課長	坂野 和信
主任調査員	富田 和夫

II 遺跡の立地と環境

在家遺跡(1)は熊谷市玉井地区に所在し、J R総原駅の北東約1kmに位置する。在家遺跡の所在する玉井地区は、熊谷市域の北西部にあたり、地形的には櫛引台地の北東端部付近に立地する。この櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町波久礼付近を扇頂としている。遺跡の北、及び東には利根川とその支流によって形成された広大な沖積地(妻沼低地)が広がっている。遺跡の南側一帯は、沖積世に至って、荒川の乱流によって形成された新荒川扇状地が展開している。

在家遺跡は、櫛引台地に由来する関東ローム層を基盤層とするが、その後の関東造盆地運動による地盤の沈降、及び河川の氾濫の影響を受け、厚い表土層が形成されていた。現地表からローム層までの深度は遺跡内で、1~1.5mにも及ぶ。遺跡の標高は34~35m程度である。

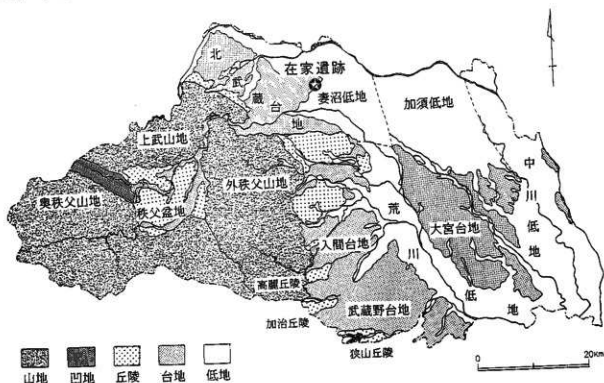
次に本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。まず、旧

石器時代に関してはほとんど不明という。唯一、龍原裏遺跡(C)から尖頭器が出土しているのみである。

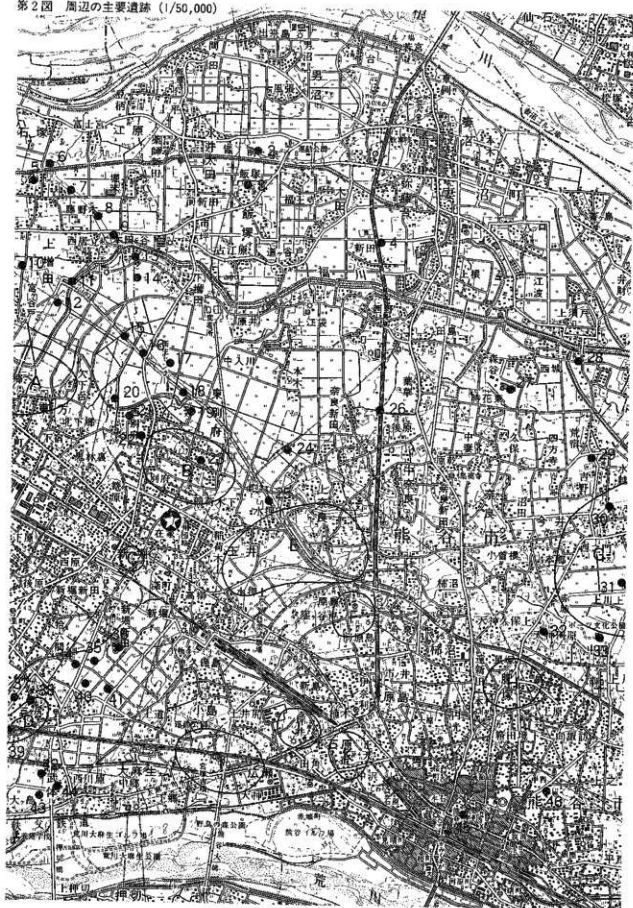
縄文時代の生活痕跡は、主に櫛引台地上に残されている。三ヶ尻林遺跡(39)では、前期黒浜式の集落が調査され、近接する三ヶ尻大王遺跡(37)では中期~後期の集落が検出されている。中期末から後期には、新屋敷東遺跡、明戸東遺跡(10)、原遺跡(11)等、妻沼低地の自然堤防上にも集落が形成されるようになる。

縄文晩期~弥生前期の遺物は上敷免遺跡から発見され、達賀川式の壺の出上は特筆されるものである(瀧瀬他1993)。この上敷免遺跡は、従来より弥生中期(須和田期)の再葬墓の遺跡として著名であるが、最近では横間栗遺跡(17)でも再葬墓が検出されている。中期の集落に関しては上敷免遺跡や関下遺跡(18)から住居跡が4軒検出されているほか、三ヶ尻上土遺跡(38)からは須和田式の壺形土器が発見されている。弥生時代後期の遺跡は沖積地の自然堤防上にあるが、数は少ない。

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の主要遺跡 (1/50,000)



明戸東遺跡が代表である。弥生時代の遺跡は主に沖積低地に多く、既にこの段階から低地を利用した積極的な水田経営が行われていたことが推定される。

古墳時代に入ると遺跡分布が増加する傾向がある。前期の遺跡では、池上遺跡、池守遺跡、北島遺跡(33)、本郷前東遺跡、東川端遺跡(12)、東別府奈里遺跡、横間栗遺跡(17)、清水上遺跡(14)、根緒遺跡(16)などがあり、東川端遺跡では方形埴輪墓も検出されている。

古墳時代中期の遺跡は比較的発見例が少なく、熊谷市常光院東遺跡、行田市鴻池・武良内・高畑遺跡で集落が検出されている程度である。

古墳時代後期になると、大規模集落の成立とともに遺跡数が飛躍的に増加する。台地上には三ヶ尻天王遺跡、三ヶ尻中学校遺跡が、低地の自然堤防上には北島遺跡、東川端遺跡、上敷免遺跡、新屋敷東遺跡、本郷前東遺跡、城北遺跡(9)、ウツギ内遺跡(6)、居立遺跡(13)、前遺跡(15)など大規模な集落が形成されている。

また、古墳時代後期には数多くの古墳群が分布している。木ノ本古墳群(A)、別府古墳群(B)、玉井古墳群(E)、龍原裏遺跡、原島古墳群(F)、三ヶ尻古墳群(D)、広瀬古墳群(I)、坪井古墳群(J)、石原古墳群(K)、中条古墳群(G)、肥塚古墳群(H)等枚挙にいとまなく、古墳時代後期集落はかなり増加傾向にあるとはいえ、また、古墳群の数に比して少なく、今後、低地の自然堤防上に該期の集落が多数発見されるものと予想される。

奈良・平安時代には律令体制に組み込まれ、全国的に国郡里制の整備に伴い、地方行政組織が整う。本遺跡周辺はおそらく武蔵国幡羅郡に属したと推定される。幡羅郡は幡羅、上奈、下奈、八沢、那珂、荏原、霜見、余戸の8郷を有する中郡で、男衆郡と並んで武蔵国の中にあつては最大規模の郡の一つである。幡羅郡の郡衙所在地は不明であるが、深谷市に「幡羅」の遺称地が存在する。

本遺跡周辺においては西別府廃寺(21)が注目される。基壇跡と、瓦溜まり、溝跡などが確認され、複弁9葉蓮華文軒丸瓦、型挽三重瓦軒平瓦の存在から8世紀初頭の創建と考えられている(吉野1994)。幡羅郡衙との関連は不明であるが、幡羅郡の郡署的な機能を有していたとする見解が提出されている(酒井1995)。

西別府廃寺北西に隣接する西別府祭祀遺跡(20)からは、神社裏側の湧水地点から滑石製模造品類が多量に出土している。この中には、有孔円板、剣形などの他に馬形や櫛形のものがあり、古墳時代以降、奈良時代に至るまで水辺の祭祀が執り行われた神聖な場所であったことを物語っている。西別府廃寺と併せてその存在意義は軽視できないであろう。最近では、熊谷市諏訪木遺跡で、河川を利用した律令期の祭祀遺物が発見されており、注目される。

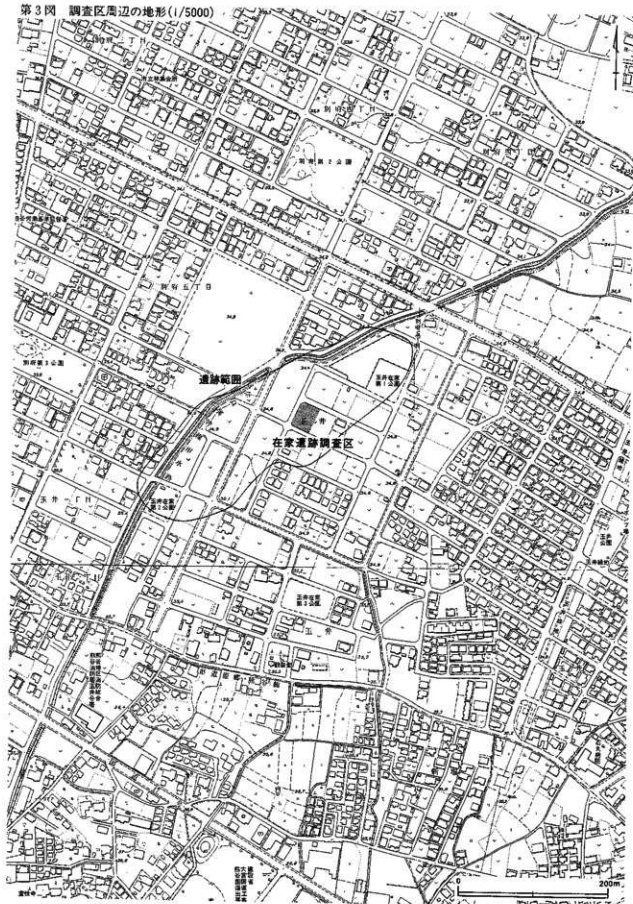
周辺の律令期集落に関しては、上辻遺跡(34)、下辻遺跡(35)、樋の上遺跡(36)、三尻中学校遺跡、東川端遺跡、上敷免遺跡、新屋敷東遺跡、鶴森・入胎遺跡、北島遺跡・新ヶ谷戸遺跡(25)などが調査されている。上辻、下辻、樋の上、三尻中学校遺跡は本来同一集落

第2図掲載遺跡一覧表

- | | | | | | | | |
|----------|-----------|----------|------------|------------|------------|------------|-----------|
| 1 在家遺跡 | 2 飯塚北遺跡 | 3 飯塚遺跡 | 4 弥生寺新田遺跡 | 5 蕨沼氏館跡 | 6 ウツギ内遺跡 | 7 砂田遺跡 | |
| 8 柳町遺跡 | 9 城北遺跡 | 10 明戸東遺跡 | 11 原遺跡 | 12 東川端遺跡 | 13 居立遺跡 | 14 清水上遺跡 | 15 前遺跡 |
| 16 根緒遺跡 | 17 横間栗遺跡 | 18 関下遺跡 | 19 石田遺跡 | 20 西別府祭祀遺跡 | 21 西別府廃寺 | 22 西別府館跡 | 23 別府城跡 |
| 24 天神下遺跡 | 25 新ヶ谷戸遺跡 | 26 横塚山古墳 | 27 鶴森・入胎遺跡 | 28 東城遺跡 | 29 光屋敷遺跡 | 30 中条氏館跡 | 31 女塚古墳 |
| 32 天神遺跡 | 33 北島遺跡 | 34 上辻遺跡 | 35 下辻遺跡 | 36 樋の上遺跡 | 37 三ヶ尻天王遺跡 | 38 三ヶ尻上古遺跡 | 39 三ヶ尻林遺跡 |
| 40 若松遺跡 | 41 黒沢館跡 | 42 社裏北遺跡 | 43 社裏南遺跡 | 44 社裏遺跡 | 45 熊谷氏館跡 | 46 箱田氏館跡 | |

A 木ノ本古墳群 B 別府古墳群 C 龍原裏遺跡 D 三ヶ尻古墳群 E 玉井古墳群 F 原島古墳群 G 中条古墳群
H 肥塚古墳群 I 広瀬古墳群 J 坪井古墳群 K 石原古墳群

第3図 調査区周辺の地形(1/5000)



と考えられる一群で、現在までに住居跡14軒以上が調査されている。時期的には7世紀中葉頃から集落が形成され、8・9世紀代に最盛期を迎えるようである。典型的な律令期集落といえ、また、幡羅郡域でも中核的な集落の一つと考えてよい。

鶴森・入胎遺跡は古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡で、住居跡が159軒検出されている。奈良・平安時代の集落は入胎遺跡を中心に分布し、8世紀～9世紀代頃を中心に営まれたと考えられている。

北島遺跡も住居跡数100軒単位の大規模集落である。7世紀代から9世紀を中心とした集落で、10・11世紀代の遺物も検出されている。大規模な掘立柱建物跡や河川跡、波板状凹凸面をもつ古代の道路跡など、多様な遺構と遺物が検出されている。地域の中核集落とするに異存はないが、幡羅・埼玉・大里郡の推定境界付近にあり、いずれの郡に属するのか現状では明らかにできない。これらは、いずれも遺跡周囲に可耕地を控えた場所に営まれており、水田経営を生活基盤とする典型的な律令期集落といえるであろう。その他、当事業団で調査中の妻沼町飯塚北遺跡でも大規模な律令期集落が発見され、灰釉陶器、緑釉陶器などが豊富に出土している。本書で報告する在家遺跡もそうした一例である。特に、西別府廃寺に近接する集落として、今後重要視していく必要があろう。

しかし、現在確認できる律令期の遺跡数は、中郡である幡羅郡を構成するには遙かに及ばない。おそらく、今後、低湿地の自然堤防上から多数の集落が発見されるに違いない。律令期、幡羅郡の集落動向を語るには、

まだまだ資料不足の感否めない。今後の調査資料の蓄積を待ちたい。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が多数知られているが、実態の判明するものはほとんどない。中世の城館跡としては東方城跡、別府城跡(23)、西別府館跡(22)、肥塚氏館跡、熊谷市館跡(45)、成田氏館跡、箱田氏館跡(46)、中条氏館跡(30)、蓮沼氏館跡(5)などがある。

光屋敷遺跡(29)は、中条氏の祖、中条常光の館跡との伝承が残されており、発掘調査によって中世の井戸、堀跡などが検出されたが、時期的に齟齬があり、直接中条氏との関わりを特定するには至っていない(川口1989)。

黒沢館跡(41)では、出隅をもち全周する堀と土塁、2個所の虎口、土塼墓、集石遺構等が調査され、瀬戸美濃系の灰釉平碗や折縁深皿、かわらけ、内耳鍋など15～16世紀の遺物とともに、14～15世紀の年号が記載された板石塔婆が検出されている(金子1985)。

この黒沢館周辺には中世の遺構や遺物が多く出土しており、黒沢館南西の自然堤防上に立地する社裏南遺跡(43)、社裏遺跡(44)、社裏北遺跡(42)から合わせて56基の中世の土塼墓のほか、火葬跡1基が調査されている。また、隣接する樋の上遺跡からも土塼、土塼墓、集石遺構などが発見され、石臼、かわらけ、内耳鍋などが出土している。いずれにせよ、中世の集落に関する資料はまだまだ不足しており、具体像を示せないのが現状であろう。

III 遺跡の概要

在家遺跡は埼玉県熊谷市玉井3丁目に所在し、JR高崎線龍原駅の北東約1kmに位置している。地形的には洪積扇状地である掘引台地上にあり、標高は34m前後である。遺跡の北側には奈良県用水路が北東流し、遺跡は用水路に沿って長さ125m、幅40mの範囲に展開することが明らかにしている。おそらく、その周囲にも広がるものと推定され、かなり広範囲に遺跡が形成されたと見るのが妥当である。遺跡内には古墳跡も現存し、元来在家古墳群として知られていた。遺跡及び周囲の地形は比較的平坦であるが、妻沼低地に連なる浅い谷地形が随所に広がり、かなり複雑な地形であったものと考えられる。

在家遺跡の調査は、熊谷市玉井地区土地区画整理事業に関連して計画された「フレッシュタウンがこはら」建設に伴うもので、平成6年4月1日～5月31日まで実施された。なお、調査区に隣接する道路に関しては、熊谷市教育委員会によって平成2・3年度に調査が行われ、古墳跡6基、竪穴住居跡28軒等が検出されている。古墳跡には埴輪が伴わず、胴張りの石室構造をもつことなどから7世紀代の築造と推定される。また、集落の存続時期は8世紀前半～9世紀末頃までとされ(註1)、典型的な律令期集落と捉えることができる。

1 調査の方法

在家遺跡の発掘調査は当初複数地点を予定していたため、区画整理事業地全体をカバーする10m単位の方眼を設定した。この方眼(グリッド)は、平面直角座標第IX系に基づいたもので10m×10mを単位とする横道を1グリッドとした。グリッドの原点は北西隅に置き、南にA・B・C…、東に1・2・3…の順に番号を振り、各交点をグリッド呼称とした。

遺構確認面のローム層までは重機によって掘削し、その後、人力による遺構確認作業、調査を実施した。遺構の実測は、グリッドの交点に打設した平面基準杭を基準に、地山に1m間隔の水糸を張る簡易遣り方を採用した。

2 検出された遺構と遺物

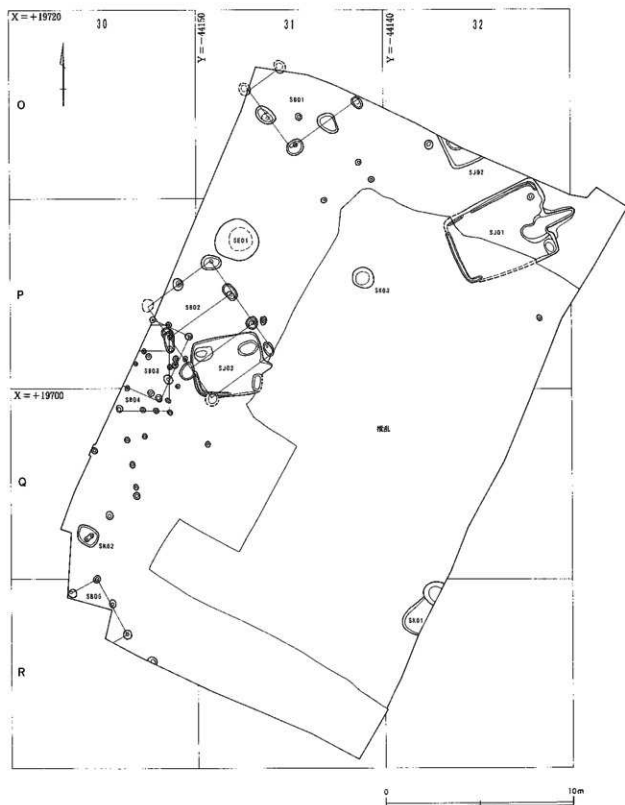
発掘調査の結果、奈良・平安時代及び中世の遺構と遺物が検出された。

まず、奈良・平安時代では竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、土壇3基が検出された。竪穴住居跡はそれぞれ単独で構築され、主軸方位もバラツキがある。遺構の遺存状態はあまり良好ではないが、住居跡の時期は8世紀後半～9世紀中葉頃までの間に営まれたものと推定される。出土遺物は土師器の杯・碗・甕・古付甕、須恵器の杯・碗・高古碗など、日常容器が主体である。また、鉄製の鎌、鍬や、土釜も量的には少ないが発見されている。そのほか、第1号住居跡から出土した土師器碗の体部には墨書が施されていた。文字は不鮮明な部分があるため、確定はできないが、「向上」または「宰」ではないかと推定している。残念ながら意味は不明とせざるを得ない。掘立柱建物跡は2棟検出されたが、やはり攪乱や調査区外にかかるため規模を確定することができない。おそらく、2×2間、2×3間程度の比較的小規模な建物と推定される。土壇は3基検出されたが、性格を特定することはできない。ただ、第1号土壇については、攪乱の下から検出されたために勿論確定はできないが、竪穴住居跡の掘り方の可能性が高いものと考えている。

中世の遺構としては井戸跡1基、掘立柱建物跡3棟、ピット群がある。中世の遺物が伴わないために、正確な時期は不明であるが、遺構埋土が古代のものや異なること、掘立柱建物跡の柱穴が小さく不揃いなのが多い点などから判断したものである。いずれにせよ、調査区の制約が大きく、在家遺跡全体の时期的な消長や盛衰に関しては、周辺地域の調査と熊谷市教育委員会による報告を合わせて、今後検討をしなければならないであろう。

註1 在家遺跡の熊谷市調査区の様相については、熊谷市教育委員会吉野健氏のご指示による。

第4図 在家遺跡全側図(1/200)



IV 遺構と遺物

1 奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第5図)

調査区北東部のO・P-32区に位置する。北側には約2m隔てて第2号住居跡が構築されている。遺構の南側約1/3程は擾乱を受け、床面まで削平されていた。部分的に壁溝が残存するために住居跡の規模はうかがうことができる。

住居跡の平面形態はやや不整な長方形で、規模は長軸5.50m、短軸4.25m、深さは約0.50mである。主軸方位はN-69°-Eである。

残存部の床面は緩やかな凹凸をもつが、比較的堅く踏み固められていた。住居跡覆土にはハードロームブロックを多量に含む層(第3層)が挟在し、自然堆積というよりも、部分的にせよ人為的に埋められた可能性が高いものと判断される。

カマドは北東壁の中央からやや南に寄った位置に設置されていた。壁外の掘り込みは1.45m、焚き口部幅0.75mと長大である。燃焼部と煙道部の境界は不明確で、底面、側面ともに連続する。側壁は明褐色粘土を張って構築され(第16層)、粘土張りの側壁内面は強く被熱していた。焚き口部の袖は不明確であったが、粘土を積み上げた痕跡は認められなかった。焚き口部前面には長径0.80mのピットが張り込まれていた。ピット上面には床土が施されていたため、掘り方の一部と考えられる。

カマド埋土は基本的に天井部崩落土とその後の堆積土からなる。第12・13層が明褐色系の粘土を使用した天井部の崩落土で、第14層が灰層である。灰層は焚き口から燃焼部にかけて認められたが、堆積層自体は薄い。第12層上部に堆積する10・11層は天井部崩落後の堆積層である。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部に設けられていた。平面形は不整円形で、規模は長径0.78m、短径0.55m、深さ0.53mである。埋土は4層に区

分され、最下層に堆積した灰褐色土の上部に相当する位置から、ほぼ完形に復元できる須恵器の坏が出土した(第6図7)。

ピットはカマド左側から1本検出された。規模は直径0.55m、深さ0.65mで、規模的には住居に伴う柱穴と考えてもよいが、やや壁に寄りすぎる点や、掘り方を調査しても対応する柱穴が検出されなかったことから、現状では遺構に伴う柱穴かどうかは不明とせざるを得ない。

壁溝は途切れる箇所はあるが、ほぼ半周する。深さは5~15cm程度である。

出土遺物には土師器の坏・碗・甕・台付甕、須恵器坏・碗・高台付き碗・蓋、鉄製鏃・鏃・釘(?)、土錘、軽石などがある。

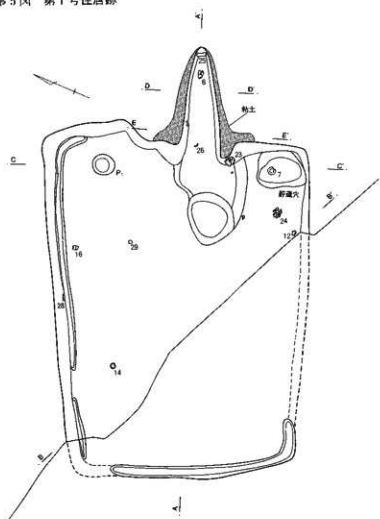
第6図1~5は土師器坏である。1~4は平底の底部と体部に無調整部を残す点で共通する。6は碗で、内面に放射状暗文、見込み部にラセン暗文が施されている。また、体部外面には「向上」、または「卒」かとも読める黒書が記されていた。

土師器の甕はいわゆる武蔵型甕で、口縁部が「弓状」に外反するもの(18~21)と口縁部上半が外に折れ、「コ」の字状口縁に近づいているもの(22)がある。

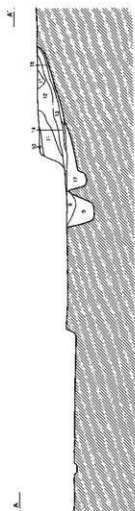
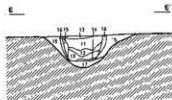
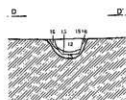
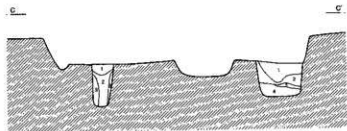
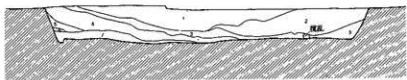
7~17は須恵器で、7・8・11・12・17が末野窯跡群窯、産地不明の10を除くと他は南比企窯跡群窯である。坏底部は全て回転糸切り後無調整である。13は坏底部を再加し、上面と側壁、底部外周部に摩滅痕がある。用途は不明。10の坏は厚ぼったい器壁と白色粒子を多量に含む胎土に特徴がある。末野窯に近いが片岩は含まれない。両窯跡群相互の出土比率は南比企産がやや多い傾向にある。図示した以外の器種としては須恵器の甕破片が2片出土している。

25は鉄鏃でカマド煙道部先端から出土した。26は角釘と思われるが、錆化が進んでおり詳細は不明。27は鉄鏃基部で、鋒を欠く。基部には闊篋被が付く。29は軽石で全面が磨って面取りされている。

第5図 第1号住居跡



B 14.00

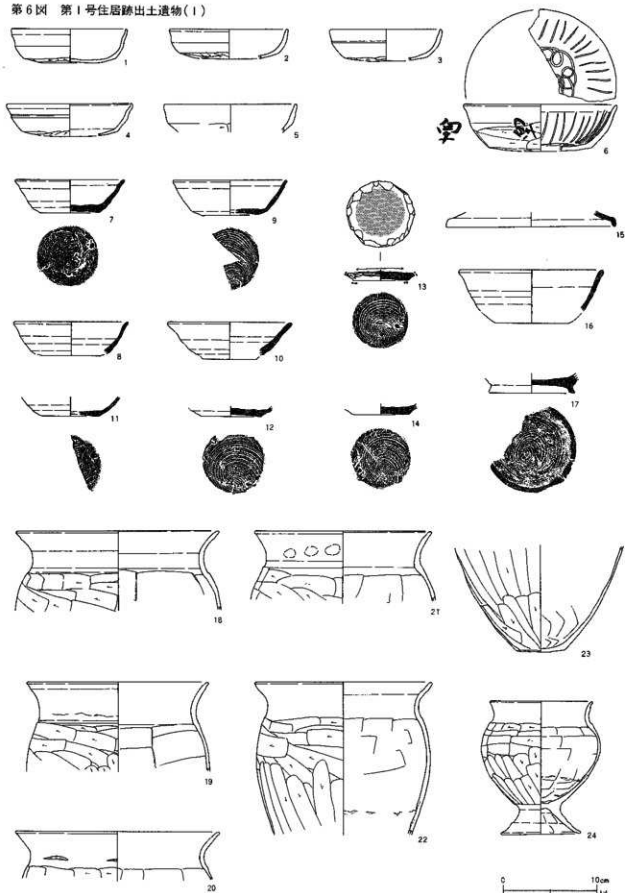


SJ01

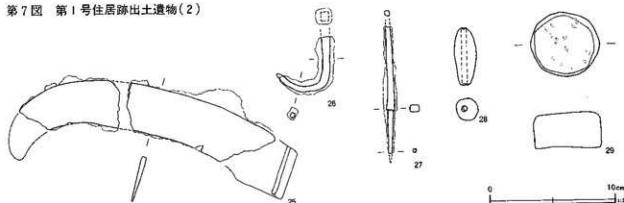
- 1 明褐色土 焼土粒子・炭化物少量、ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒下・焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 3 暗褐色土 ハードローム多量
 - 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・ローム塊少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒子微量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
 - 8 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量
 - 9 暗褐色土 ロームブロック・焼土・炭化物
 - 10 暗褐色土 ローム粒子
 - 11 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土
 - 12 暗褐色土 砂質粘土。焼土ブロック・焼土土ブロック少量
 - 13 暗褐色土 焼土層。明褐色粘土少量
 - 14 暗褐色土 炭化物・焼土粒子少量
 - 15 暗褐色土 明褐色粘土。焼土ブロック
 - 16 暗褐色土 被熱粘土層。炭化物多量
 - 17 暗褐色土 ロームブロック・焼土層
- 野溝穴
- 1 暗褐色土 ロームブロック混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
 - 3 暗褐色土 黒土
 - 4 暗褐色土 暗褐色土
- ピット 1
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック
 - 3 暗褐色土

0 2m 11.60

第6图 第1号住居跡出土物(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物(2)



第1表 第1号住居跡出土遺物観察表(第6・7図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.2)	3.6		ABC	良好	橙褐色	45%	掘り方。器面風化。体部無調整部残す
2	土師環	(12.5)	3.1		AB	普通	褐色	20%	覆土
3	土師環	(11.8)	3.3		A	良好	褐色	25%	掘り方。体部無調整部残す
4	土師環	(13.2)	3.4		ACD	普通	褐色	35%	覆土
5	土師環	(14.0)	3.0		AC	良好	淡褐色	10%	掘り方
6	土師環	(16.2)	4.9	(11.0)	AB	良好	褐色	25%	Na3。覆土。墨書。内面放射+ラセン暗文
7	須恵環	11.5	3.5	6.2	AG片	良好	灰色	100%	貯蔵穴。未野産
8	須恵環	(12.0)	3.4		ABF片	不良	淡褐色	10%	貯蔵穴。未野産。クロコ右回転
9	須恵環	12.0	3.7	6.0	A針	普通	黄灰色	70%	掘り方。南比金産。クロコ右回転
10	須恵環	(13.0)	3.5		ACD	普通	淡褐色	15%	覆土。産地不明。白色粒子多
11	須恵環		2.1	(6.0)	ADG	不良	黄灰色	30%	掘り方。未野産。底部糸切り
12	須恵環		1.1	6.5	AC片	良好	黄灰色	75%	Na8。床直。未野産
13	須恵環		0.9	5.7	A針	良好	灰色	100%	覆土。坪底部再加丁品。南比金産
14	須恵環		1.2	6.0	AC針	良好	灰褐色	95%	Na14。床直。南比金産
15	須恵蓋	(18.0)	1.6		AC針	良好	灰色	5%	掘り方。南比金産。クロコ右回転
16	須恵瓶	(15.2)	4.4		AG針	良好	黄灰色	20%	Na1。カマド。覆土。南比金産。クロコ右回転
17	須恵瓶		2.1	9.0	ACG片	普通	灰色	75%	掘り方。未野産
18	土師甕	(21.8)	8.4		ABD	良好	褐色	35%	掘り方
19	土師甕	(19.2)	9.5		ACD	良好	褐色	20%	
20	土師甕	(21.6)	5.1		ABCD	良好	淡褐色	20%	貯蔵穴
21	土師甕	(19.0)	7.5		ABD	良好	褐色	30%	掘り方
22	土師甕	(19.0)	16.3		ABD	良好	褐色	20%	掘り方
23	土師甕		11.1	5.0	ABF	良好	暗褐色	75%	Na5。覆土
24	土師台付甕	10.8	14.2		ABC	良好	淡褐色	80%	Na7。覆土
25	鉄鏃	No2。覆土。推定残長約20.4cm。幅3.9cm							
26	鉄釘	No4。覆土。錆化著しく、詳細不明							
27	鉄鏃	No13。覆土。残長10.0cm。鋒部と基部先端を欠く。長頸円筒籠型式							
28	土師	長さ4.5cm。最大径1.7cm。孔径0.4cm。胎土A。重さ10g							
29	軽石	最大径5.4cm。高さ2.9cm。重さ45g							

第2号住居跡(第8図)

調査区北端のO-32区に位置する。南側に第1号住居跡、西側に第1号掘立建物跡が近接して構築されている。住居跡の大半は調査区外に位置するため、遺構の全体像は不明である。

住居跡の形態は方形系と思われる。残存規模は南西辺長2.20m、南東辺長1.85mである。確認面から床面までの深さは0.65mと非常に深い。主軸方位は、南東辺

を基準にするとN-61°-Eである。

床面はやや凹凸をもつが、全体に堅く踏み固められていた。

埋土は一次堆積層(第2層)堆積後、ロームブロックを多量に含む黒色土で一気(に)に埋没した状況が認められた(第1層)。自然堆積というよりも、人為的に埋め戻された可能性が高いものと判断される。

カマド、貯蔵穴、ピット等の付属施設は調査区内か

らは検出されなかった。唯一、調査区境の壁際から検出された土壌は上面に貼床が施され(第3層)、床下土壌、または掘り方の一部と考えられる。

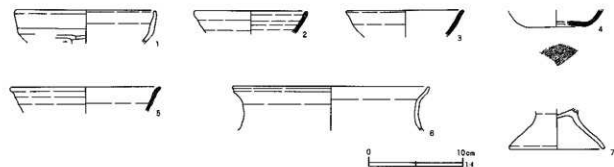
出土遺物は少ない。土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の坏・碗がある(第9図)。その他、図示した以外の器種としては須恵器甕と甕類の胴部片が各1片出土した。

第9図1は土師器の坏で底部を欠く。口唇部は内湾気味におさめられている。体部上位に無調整部を残し、体部下位はヘラケズリ調整されている。

2～4は須恵器坏、5は碗である。全体の器形が判明する資料はない。2・3の坏口縁の外反はほとんどなく、4の坏底部には糸切り後の再調整は施されていない。5の碗は器壁が薄く、口縁部は外反している点に特徴があるが、高台碗となるか、無台碗かは不明である。2の胎土には片岩が認められないものの末野産により近い。他は南比企産である。

須恵器坏・碗類は5点検出され、南比企窯跡群産が3点、末野窯跡群産(類末野産を含む)が2点となり、産地別比率では南比企産が僅かに上回っている。なお、須恵器甕は南比企産、甕は白色針状物質が含まれないが、南比企産に類似している。

第9図 第2号住居跡出土遺物

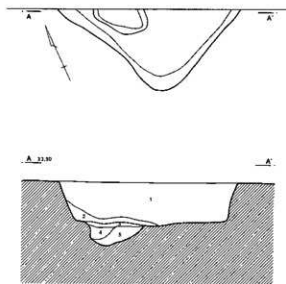


第2表 第2号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器坏	(14.8)	3.5		BC	良好	褐色	5%	
2	須恵器坏	(12.0)	2.4		AC	普通	淡褐色	5%	末野産か。内面ロクロ目顯著。ロクロ右回転
3	須恵器坏	(12.4)	2.8		A針	良好	淡灰色	5%	南比企産
4	須恵器坏		1.8	(6.0)	A針	良好	黄灰色	20%	南比企産
5	須恵器碗	(16.0)	2.8		A針	良好	灰色	5%	南比企産。ロクロ右回転
6	土師甕	(20.8)	4.6		ABC	良好	橙褐色	10%	
7	土師台付甕		4.3	9.8	ABC	良好	褐色	45%	掘り方

6は土師器甕。肩部以下を欠くが、いわゆる「コ」の字状口縁甕になるものと考えられる。7は台付甕の脚部片である。

第8図 第2号住居跡



SJ02

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック多量、焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 明褐色土 ハードローム粒子多量
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量
- 5 暗黄褐色土 ハードローム粒子・ブロック

0 2m
1:80

0 10cm
1:4

第3号住居跡(第10図)

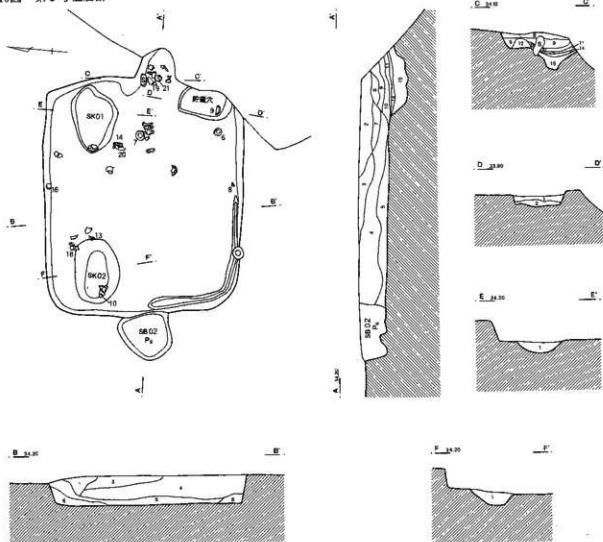
調査区西側のP・Q-30・31区に位置する。カマド先端部と東壁の一部を削平されているが、住居跡の大半は遺存している。第2号掘立柱建物跡との切り合い関係は本住居跡の方が古いと判断したが、掘立柱建物跡の南西側梁間の中間柱が検出されなかった点には間

題も残されている。

平面形態は方形で、規模は長軸長3.65m、短軸長3.17m、深さ0.45mである。主軸方位はN-86°-Eである。

床面は住居中央部から西壁にかけての部分が堅く踏み固められ、他の壁際は全体に軟弱であった。

第10図 第3号住居跡



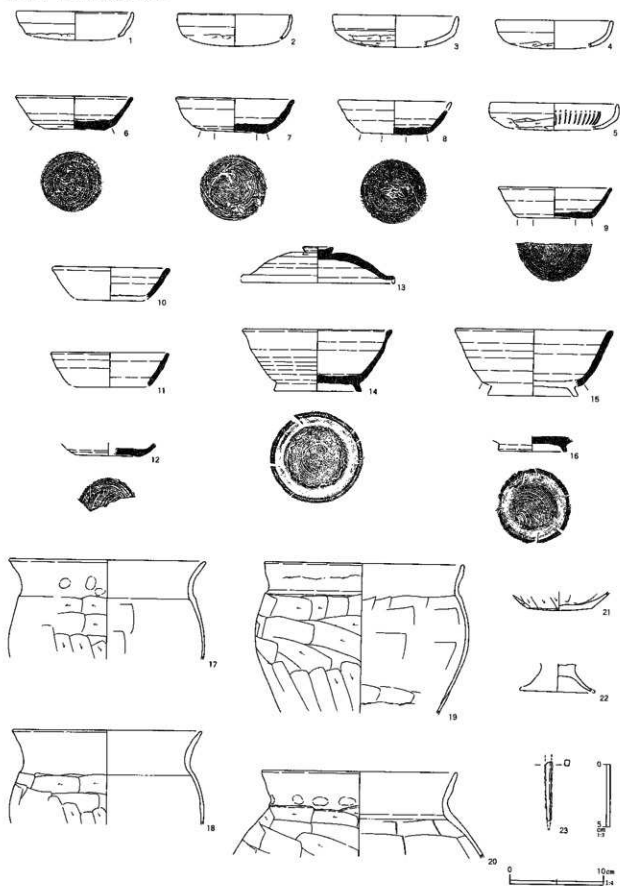
SJ 03

- 1 灰褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。黒色土ブロック
- 6 黒色土 ローム粒子微量
- 7 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子多量。炭化物粒子少量
- 8 黒褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子少量
- 9 暗黄灰褐色土 粘質土
- 10 暗褐色土 焼土粒子多量・ローム粒子少量

- 11 炭化物層 焼土粒子少量
 - 12 暗黄褐色土 粘質土。ローム粒子多、焼土粒子少量
 - 13 暗黄褐色土 粘質土
 - 14 暗黄褐色土 しきりあり。粘床
 - 15 黒褐色土 ロームブロック多量
- 貯蔵穴
- 1 灰褐色土 炭化物混入。焼土粒子・ローム粒子微量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- SK 01
- 1 暗褐色土 ローム粘土・粘土ブロック・焼土粒子多量
- SK 02
- 1 黒褐色土 ローム粘土・ブロック多量

0 2m 31.60

第11図 第3住居跡出土遺物



住居埋土は、一次堆積(第5・6層)後、ロームブロックを多量に含む層(第4層)が厚く堆積しており、自然堆積にしては不自然である。おそらく人為的に埋め戻された可能性が高い。

付属施設としてはカマド、貯蔵穴、土壇がある。カマドは東壁の中央から僅かに南に寄った位置に設けられていた。煙道部は削平されており全長は不明、燃焼部の残存幅は0.65mである。カマドの軸は流出した可能性が高く、明瞭に検出することはできなかった。また、燃焼部底面の北側壁に寄った位置には、石製支脚が掘えられていた。支脚は南側に傾いており、上半は強く被熱していた。

埋土の状況は9・10・12・13層が天井部崩落上、11層が灰層に相当するものと考えられる。14・15層は掘り方である。

貯蔵穴はカマド右脇に掘り込まれているが一部份削平されている。規模は残存長0.88m、深さ0.20mである。土壇は2基検出された(SK01・SK02)。いずれも検出状況から住居掘り方の一部、または床下土壇と

考えられる。

出土遺物には土師器の坏・甕・壺・台付甕、須恵器坏・釜・高台碗と鉄釘がある(第11図)。図示した以外にも須恵器甕の胴部片が1片検出されている。遺物の出土状況は全体に床面から浮いているものが多い。9の須恵器坏は貯蔵穴内、19の土師器甕はカマド内から出土した。

土師器坏(第11図1～5)は、いずれも口縁部は直立ないし開き気味に立ち上がり、体部上位に無調整部を残す。5は内面に放射状暗文が施されている。

須恵器坏のうち、器形の判明する6～9は底部糸切り後再調整が施されている。但し、12には再調整はない。13は高台碗の蓋で、受け部を僅かに欠いている。14～16は高台碗で、14の口縁端部には内削ぎ状の面取りがある。

須恵器の産地別比率を示すと、坏は14点中、末野産5点、南比企産9点と南比企産の比率が高い。高台碗は3点ありいずれも末野産、蓋も末野産である。甕は1点あり、南比企産である。

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	機成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.2)	2.6		A	良好	褐色	20%	覆土
2	土師坏	(12.0)	2.6		AB	良好	褐色	10%	覆土
3	土師坏	(13.3)	3.3		A	良好	褐色	15%	カマド上層
4	土師坏	(12.5)	2.7		AB	良好	褐色	10%	カマド上層
5	土師坏	(13.6)	2.7		AB	良好	褐色	20%	覆土
6	須恵坏	12.4	3.5	6.3	C片	良好	灰色	70%	Na21。覆土。末野産。底部+体部下端ヘラケズリ
7	須恵坏	12.4	3.6	7.0	C片	普通	灰色	95%	Na16。覆土。末野産。大粒の石英、片岩多
8	須恵坏		2.6	7.0	AC針	普通	灰色	60%	Na22。覆土。南比企産
9	須恵坏	(12.0)	3.2	7.9	A針	普通	灰色	45%	貯穴Na1。南比企産。底部周辺回転ヘラケズリ
10	須恵坏	(12.2)	3.3		C片	普通	灰色	15%	Na1。覆土。末野産
11	須恵坏	(12.4)	3.5		AC針	普通	灰色	25%	カマド上層。南比企産
12	須恵坏		1.4	(6.4)	CF片	良好	灰色	30%	覆土。末野産
13	須恵蓋		3.4		C片	普通	灰色	30%	Na7。覆土。末野産。一部橙褐色
14	須恵高台碗	15.8	6.6	9.2	C片	良好	暗灰色	80%	Na17。覆土。末野産
15	須恵高台碗	(16.6)	5.9		C片	普通	淡褐色	20%	カマド上層+覆土。末野産
16	須恵高台碗		1.6	6.8	CF片	やや不良	褐色	95%	Na20。覆土。末野産
17	土師甕	(20.8)	10.5		AB	良好	褐色	10%	覆土
18	土師甕	(20.0)	10.0		AB	良好	褐色	40%	Na3。覆土
19	土師甕	(21.5)	16.0		ABC	普通	褐色	20%	Na2。覆土
20	土師甕	20.7	9.1		AB	良好	褐色	50%	Na17。覆土
21	土師甕		2.0	7.0	AB	良好	淡褐色	90%	カマド内Na5
22	土師台付甕		3.0		B	良好	褐色	25%	覆土
23	鉄製品	残長4.7cm。鉄線頭部又は、鉄釘と思われる。両端欠損							

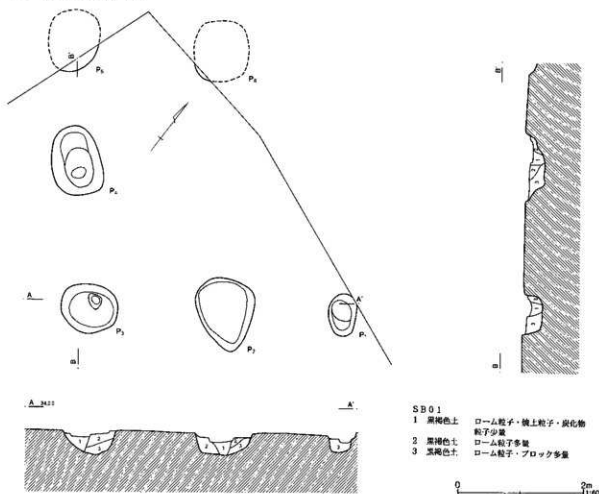
(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第12図)

調査区北端のO-31区に位置する。調査区外に延びているため、建物全体の規模は不明である。おそらく2×2間、または2×3間の側柱建物と推定される。主軸方位はN-51°-Eである。

P2~P4には柱抜き取り痕が確認され、柱間寸法は2.4m前後と思われる。但し、この寸法をP1~P2間に適用するとP1が外れてしまう。また、P1の柱掘り方規模が他に比して小規模である点に注意を要する。P1の南東調査区外に本来の柱穴が存在する可能性もある。

P5・P6に関しては、柱穴の掘り込みが辛うじて検出されたのみで、具体的な配置は明らかにできなかった。柱掘り方の形態は不整楕円形で、P1を除くと第12図 第1号掘立柱建物跡



長径0.8~1.15mと比較的規模が大きい。P1は長径0.65mと小規模である。

埋土は黒褐色土を基調に構成される。1層は柱抜き取り痕、2・3層は掘り方埋土で、ロームの混入が目立った。

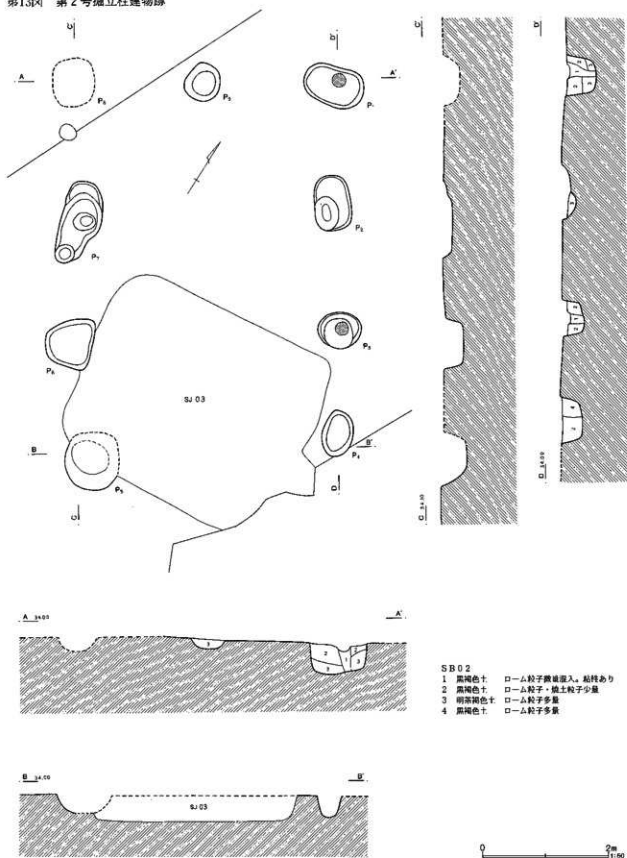
出土遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土したのみで、正確な時期決定はできないが、8~9世紀頃のものとして推定される。

第2号掘立柱建物跡(第13図)

調査区中央西部のP・Q-30・31区に位置する。第3号住居跡と重複し、上層観察の結果、本建物跡の方が新しいものと判断した。

P8に相当する柱穴が調査区外に位置すること、また、P4~P5間の梁行中間柱穴が検出できなかった

第13図 第2号掘立柱建物跡



め、建物規模の詳細は不明確であるが、 2×3 間の側柱建物と考えられる。規模は桁行5.70m、梁行4.20m、主軸方位はN-34°-Wである。

柱穴はP1とP3で確認されたのみで、他の柱穴からは明確に検出できなかった。桁行の柱間寸法はP1-P2、P2-P3間は1.95m(6.5尺)等間となるが、P3-P4間は1.80m(6尺)とやや短い。梁行に関しては不明確であるが、P1-P9間が2.10mとなる。

柱掘り方の形態は一定せず、規模も長径0.60m~1.35mと幅がある。深さは全体に浅く、最も深いP1でも0.45mである。

埋土は第1層が柱穴、2~4層が掘り方埋土と考えられる。

出土遺物は少なく、いずれも細片である。土師器環と須恵器環・甕がある(第14図)。土師器環は口縁部が開く器形で、体部にはヘラケズリが施されている(1)。

第4表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.3)	2.7		AB	良好	橙褐色	10%	Pit 6
2	須恵環		0.8	(6.4)	A C 片	良好	黄灰色		Pit 6。末野産
3	須恵甕				C 針	良好	暗灰色	5%	Pit 6。南比企産

(3) 土壌

第1号土壌(第15図)

調査区南東部のR-32区に位置する。土取りによる攪乱の下から検出されたもので、遺存状態は極めて悪い。また、調査区外に延びているため、形態・規模等の詳細は不明である。規模は残存長3.00m、最大幅1.17m、深さ0.48mである。底面は2段に掘り込まれている。

性格は不明であるが、比較的規模が大きいこと、本来、かなりの深さを持った遺構であることから住居跡の掘り方の可能性も残されている。

出土遺物は土師器細片が1片出土したのみで、時期の確定は難しい。

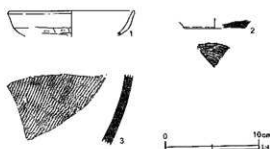
第2号土壌(第15図)

調査区南西部のQ-30区に位置する。形態は不整方形で、底面に小ピットが2本穿たれている。規模は長

須恵器環は底部小片で、回転糸切り後無調整である。末野産(2)。須恵器甕は胴部の破片で、外面は平行叩き、内面は鱗状の当具痕が残されている。南比企産である(3)。

建物の構築時期は不明確であるが、第3号住居跡よりも新しいという所見と、第14図2の須恵器環の様相から9世紀代と推定しておきたい。

第14図第2号掘立柱建物跡出土遺物



軸長1.10m、短軸長1.00m、深さ0.25mである。

覆土は3層に分かれ、第1層には焼土粒子が含まれ、第2・3層にはローンプロックが多量に含まれていた。性格は不明である。

出土遺物は土師器環と土鍾がある(第16図1・2・4~6)。

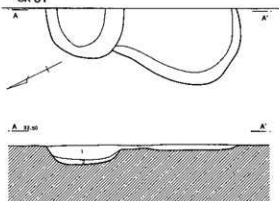
1は土師器環口縁部小片で、口縁部は強く横ナデされている。体部上位は無調整部を残し、下部をヘラケズリされている。2は平底風の器形になると思われ、底部はヘラケズリ、体部は無調整部を広く残す。土鍾は3点検出され、いずれも細身で小型の製品である。

第3号土壌(第15図)

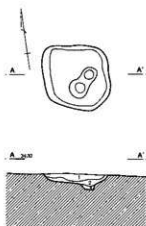
P-31区に位置する。形態は隅丸方形で、規模は長軸長1.25m、短軸長1.00m、深さ0.35mである。攪乱の下部から検出されたために、本来の深さは1mを越

第15図 第1～3号土墳

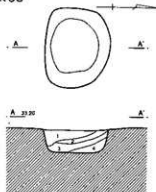
SK 01



SK 02



SK 03



SK 01

- 1 灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量含む

SK 02

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量

SK 03

- 1 灰褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ハードロームブロック主体、暗褐色土少量混在
- 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量

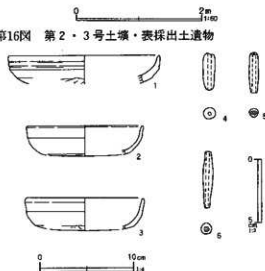
えるものと考えられる。底面はほぼ平坦である。

埋土は4層に分かれるが、ロームブロックの混入が多い。性格は不明である。出土遺物は土師器細片が少量出土した。

(4) 表採遺物

第16図3は土師器環で、底部の大半を欠く。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部は横ナデ。体部は無調整部を広く残し、底部はヘラケズリされる。いわゆる北武蔵型環である。

第16図 第2・3号土墳・表採出土遺物



第5表 第2・3号土墳・表採出土遺物観察表(第16図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師皿	(16.0)	3.0		C	良好	褐色	5%	SK 02
2	土師環	(12.4)	3.0		BD	良好	褐色	5%	SK 03
3	土師環	(12.4)	3.3		ABC	良好	褐色	10%	表採
4	土鏝	長さ2.9cm。最大径1cm。孔径0.3cm。胎土A。						重さ2.58g。SK 02	
5	土鏝	長さ3.2cm。最大径0.7cm。孔径0.3cm。重さ1.5g。SK 02							
6	土鏝	長さ4.5cm。最大径0.8cm。孔径0.25cm。胎土A。						重さ2.72g。SK 02	

2 中世

(1) 掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡(第17図)

調査区西端部のP・Q-30区に位置する。中世ピット群集中区の一角にあり、第4号掘立柱建物跡と重複する。調査区外に延びるものと思われ、建物全体の規模等の詳細は不明である。規模はP1-P5間が3.70m、P1-P7間が2.10mである。主軸方位は、P1-P5間を基準にするとN-25°-Eとなる。

柱穴配置は全体に不揃いで、各柱穴距離は等間にならない。柱穴規模は直径30cm程が主体となり、円形基調で小規模な点穴が特徴である。深さは45cm以下である。

埋土は灰褐色土を基調としており、古代のそれとは異なる。第1層は柱底と思われ、粘性が強い灰褐色土で

ある。第2~4層は掘り方埋土であろう。

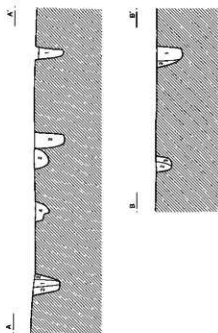
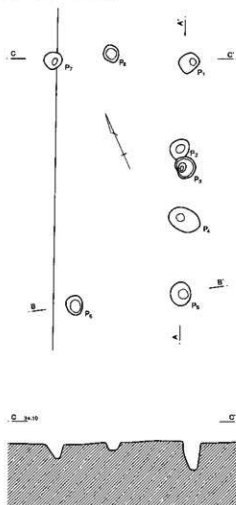
出土遺物は検出されなかった。

第4号掘立柱建物跡(第18図)

調査区西端部のP・Q-30区に位置する。第3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。建物は調査区外に延びると思われるため、全体の規模は不明である。一応P2とP5をそれぞれ北東、南東の隅柱、また、P8を南西の隅柱とすれば2×3間の側柱建物跡となる。但し、P1も柱筋に乗るためP1まで建物に取り込まれる可能性もある。

規模はP2-P5間を桁行と見ると3.15m、P5-P8間を梁行として2.70m、P1まで含めると4.50m

第17図 第3号掘立柱建物跡



SB03

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 灰褐色土 | ローム粒子少量、粘性強い |
| 2 灰褐色土 | ローム含まない |
| 3 灰褐色土 | ロームブロック混入。しまり強い |
| 4 褐色土 | ローム粒子混入 |

0 2m
P-30

である。

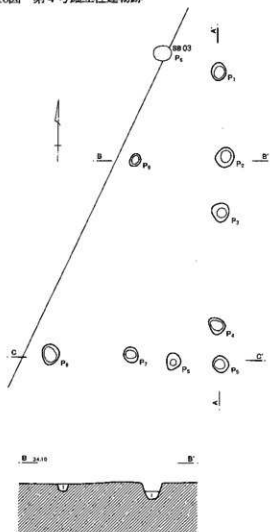
桁行の柱間距離はP1-P2間~P4-P5間まで順に1.35m、0.8m、1.7m、0.65mとなり等間に揃わず、P3-P4間が長く空いている。梁行ではP7、P9が中間柱に相当し、柱間は1.35m等間となる。また、P5とP7を2分割する位置にP6が配されている。

柱穴形態は円形で、規模は直径25cm前後と小型で、深度も40cm以下と全体に浅い。

柱穴埋土は黒褐色土を基調とし、大きな差違は見られなかった。

出土遺物は検出されなかった。

第18図 第4号掘立柱建物跡



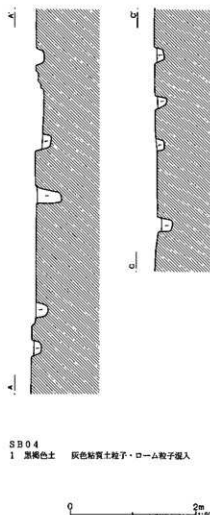
第5号掘立柱建物跡 (第19図)

調査区南西部のR-30区に位置する。調査区外に延びるため、建物の全体像は不明である。残存規模はP1-P3間3.20m、P1-P4間1.60mで、柱筋はきれいに揃っている。主軸方位はP1-P3を基準にするとN-27°-Wである。

各柱穴間の柱間寸法は1.60m等間に揃う。柱穴形態は円形を基調としており、規模は直径40cm程、深さ25cm以下と全体に小型で浅い。

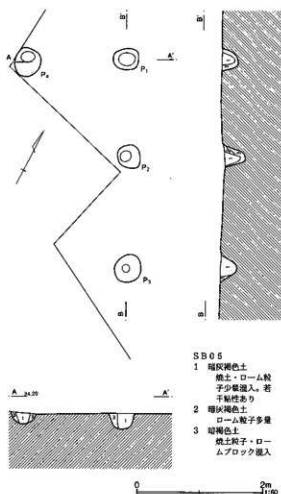
検出された柱穴にはすべて柱抜き取り痕が認められ、灰褐色土系の土壌が充填されていた(第1層)。掘り方部分にはローム粒子・ロームブロックが多く含まれていた。

出土遺物は検出されなかった。



SB 04
1 黒褐色土 灰褐色土系土壌・ローム粒子混入

第19図 第5号掘立柱建物跡



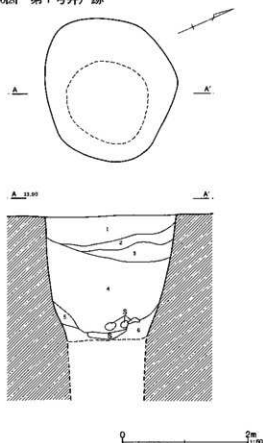
(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第20図)

P-31区に位置し、南側に第2号掘立柱建物跡が近接して構築されている。形態はやや不整な円形で、規模は径2.0～2.35mである。確認面下約2mまで掘り下げたが、底面までは達しなかった。壁は下に向かうに従い僅かに窄まる傾向にはあるが、まだ、直立に近い。断面観察による限り、木枠等の痕跡は認められず、素堀の井戸と推定される。

埋土は6層に分かれる。第1・2層は暗灰褐色土で灰色粘土粒子を含む。1層には黒色土がブロック状に混じていた。第3層は、灰色粘土粒子を多量に含む暗灰褐色土、第4層はロームブロックを多量に含む黒褐色土で厚く堆積する。両層ともに拳大～人頭大の礫が含まれていた。第5層は第4層に比較的近い土層で

第20図 第1号井戸跡



粘性のある黒色土とロームブロックが混在する。第6層はロームブロックを少量含む黒褐色土であった。

出土遺物は検出されず、時期は不明であるが、埋土の状況から中世の井戸跡と判断した。

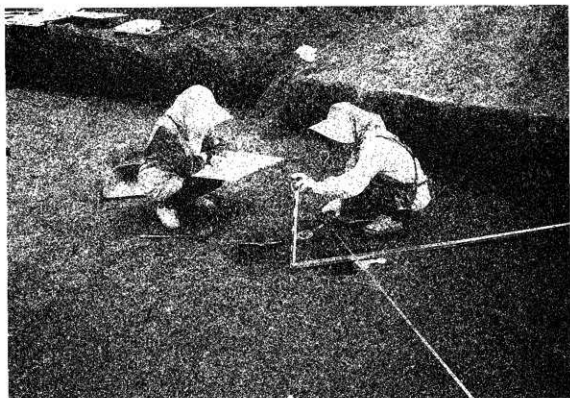
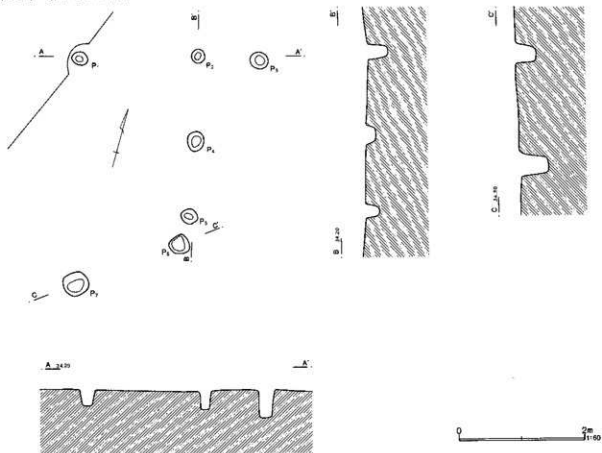
(3) ビット群

第1号ビット群 (第21図)

Q-30区に位置し、第3・4号掘立柱建物跡の南側に連なるビット群である。建物跡の可能性を求めて精査したが、規則的な配置を見出すことができなかったため、ビット群とした。

P1～P3、P2～P4ラインは直線的にビットが並び、前者はビット列の距離は2.85mであるが、P2の位置が片寄っている。後者では距離が2.50mで、各柱穴間の柱間も1.25mとほぼ等間隔に揃う。柱穴形態及び規模も掘立柱建物跡のそれとほぼ同一であり、建物群と一体となって機能したものと推定される。

第21図 第1号ビット群



V 調査のまとめ

ここでは、在家遺跡から検出された3軒の住居跡の土器様相を概括すること、器種別の土器量と比率を示すこと、更に周辺遺跡を含めた8世紀後半を中心とする竈跡別須恵器の供給比を検討することでまとめに代えたい。

1 在家遺跡の土器様相

まず、第1号住居跡の土師器環のうち、第6図1～4はいわゆる北武蔵型環で、口縁部は外方に立ち上がり、底部はヘラケズリによって平底風に仕上げられている。体部は無調整である。5・6は体部にヘラケズリを施すタイプである。将監塚・古井戸遺跡の資料を基に律令期の土師器編年を示した赤熊浩一氏にしたがえば(以下、赤熊編年と呼ぶ)、前者は坏E類、後者は坏L類に相当するであろう(赤熊1988)。器形の特徴から見て、坏E類は赤熊編年第9期～第11期に対応するものである。坏L類には内面放射状暗文を施すものと、無文のもの両者があり、第9期～10期にかけて認められる。

土師器環(第6図18～22)は武蔵型環の系列に属するもので、口縁部が弓状に外反するタイプと、「コ」の字状の口縁部に近いものがある。

作出する須恵器環は全て底部回転系切り後無調整である。9は南北企産で、内底面の径は切り離し径よりも大きく、体部から口縁部にかけて内湾気味に開く器形である。鳩山竈跡群の須恵器を分析した渡辺一氏の編年(渡辺1990)によれば、HVI期を中心とした時期に対応できよう。

7は末野産で、口径は11.5cmと比較的小さく、底径は口径の1/2を上回る。体部は直線的に開き、口縁部の外反は目立たない。器形的な特徴から正龍寺2号窯(野辺1977)、第8支群A-3号窯よりも古く、第3支群A-3号窯・第5支群A-1号窯に近い時期であろう。8世紀後半とされる白山遺跡57号住の資料と比較すると、器形的には比較的近いが、底部再調整を施すものが、本住居に含まれない点で様相的には新しい。

以上から本住居跡の時期は、9世紀前半代でも古い

段階に置けるものと考えられる。

第2号住居跡に関しては資料が少なくよく分からないが、須恵器環と土師器環の様相から9世紀前半～中葉頃と推定される。

第3号住居跡(第11図)は資料的には比較的纏まっている。土師器環に関しては全体を伺えるものはないが、扁平な器形となる(1～4)。口縁部は内湾気味に開き、体部下半に削りを加えるタイプである。底部は丸底気味になるものと、平底を意識したものがある。赤熊分類環D類、もしくはE類と思われる。

土師器環は口縁部が緩やかに外反するもので、胴部の張りは比較的弱い。

須恵器環は12を除き、底部回転系切り後、再調整が施される。6・7・10・12は末野産。6・7は底部が厚く、扁平な器形となる。口径は12.4cm。前者には体部下端にも回転ヘラケズリ調整が施される。底部再調整品と無調整品の両者をもつという点では白山遺跡57号住居跡(中村1984)の組成に近い。但し、白山遺跡57号住居跡の坏底部調整は全て手持ちヘラケズリである。白山遺跡例では深身の環と浅身の環があり、前者の割合が高い。浅身の内底部再調整が施されるものは4点中2点で、底部器厚は比較的薄く、体部が分厚い。在家遺跡3号住の末野産環は、浅身に属するが、底部が厚く、体部が薄い点で器形的には異なる。体部下端を削る例としては、熊野遺跡15・24号住居跡(埼玉県1984)などに見出すことができる。

8・9は南北企産で、8は口縁部を欠くが、底部が厚い。9は推定口径12cm。底径が大きく、扁平な器形である。渡辺編年のHVI期段階に対応するであろう。

13は概して中窪みのつまみが付く。天井部は口張り形で口縁部が屈曲する。白山遺跡57号住居跡に類似がある。対応する高台碗(14)は口唇部に内傾する面をもつ。いずれも末野産である。熊野遺跡24号住居跡、北坂遺跡14号住居跡(中島1981)出上例に近いが、本遺跡例の方が、体部下端の張りが弱く、口唇部の内傾面に

時期的には大きく見て8世紀後半と考えられる。様相的には熊野24号住、北坂14号住よりもやや後出する時期、8世紀末に比定されている白山遺跡57号住居跡に比較すると、底部再調整の比率が高く、深身で箱形に近い器形のものを含まないこと、浅身の環の口径は在家遺跡3号住の方が大きい点で、若干古相を示すといえようか。8世紀3/4期~4/4期に掛かる頃と考えておきたい。土師器の様相、南比企産須恵器の年代も大きく逸脱しないと思われる。

ここでは在家遺跡出土の出土土器量と器種組成について資料を提示しておく。今回、1号住・3号住を対象に器種別に、口縁部計測法による個体数(宇野1992)、破片数、重量について計量した(第22図)。個体数の産出については、本来個体識別によるべきであるが、個

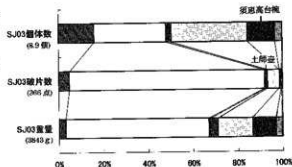
將監塚・古井戸遺跡(井上1986)では、8世紀後半～

Figure 1 is a stacked bar chart illustrating the distribution of SJO1 components across three categories: SJO1 體件数 (144 pieces), SJO1 破片数 (694 pieces), and SJO1 重量 (501 g). The x-axis represents the percentage from 0% to 100%.

The components are: 土師環 (Tsuchi-no-han), 土師笥 (Tsuchi-no-hiki), 須恵板 (Su-ei-ita), and 須恵瓶 (Su-ei-bin).

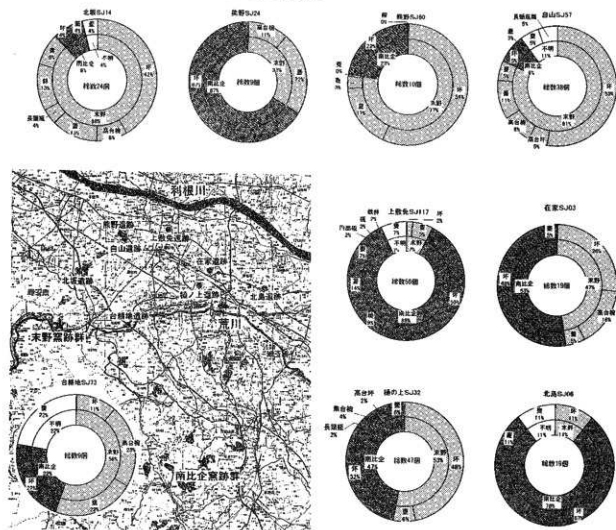
Approximate data values (estimated from the chart):

Category	土師環 (%)	土師笥 (%)	須恵板 (%)	須恵瓶 (%)
SJO1 體件数 (144 部)	~15	~45	~35	~5
SJO1 破片数 (694 片)	~10	~40	~45	~5
SJO1 重量 (501 g)	~10	~40	~45	~5



遊機名	土師坪	土師堂	土師台代堂	土師岳	須里坪	須里池	須里高台代	須里橋	須里集	合計
SJ01個体数	4.3	5.0	1.8	0	2.9	0.4	0	0.1	0.0	14.4
h"セーラー"	29.6	34.8	12.2	0	20.3	2.4	0	0.7	0	100
SJ01鏡片数	63	597	9	0	18	4	1	3	2	694
h"セーラー"	9.1	86	1.2	0	2.3	0.8	0.1	0.4	0.3	100
SJ03車重	485	3490	380	0	458	120	10	16	120	6018
h"セーラー"	8.5	69.5	7.6	0	9.1	2.4	0.2	0.3	2.4	100
遊機名	土師坪	土師堂	土師台代堂	土師岳	須里坪	須里池	須里高台代	須里橋	須里集	合計
SJ03個体数	1.4	2.9	0.2	0	3.0	0	1.1	0.3	0	6.9
h"セーラー"	16	32.1	2.4	0	34	0	12.1	3.4	0	100
SJ03鏡片数	17	320	1	3	20	0	3	1	1	368
h"セーラー"	4.6	87.4	0.3	0.8	5.5	0	0.8	0.3	0.3	100
SJ03車重	113	2465	20	130	605	0	390	110	10	3843
h"セーラー"	2.8	84.1	0.51	3.4	15.7	0	10.1	2.9	0.3	100

第23図 8世紀後半における周辺遺跡の器種構成(須恵器)



9世紀後半にかけて次第に須恵器の比率が高くなり、相対的に土師器の比率が低下するのに対照的である。在家遺跡のデータは母数が少ないために一般化するには危険が伴う。更に周辺遺跡の比較データを重ねることで器種構成の時代的・地域的特徴が鮮明になるであろう。今後の課題である。

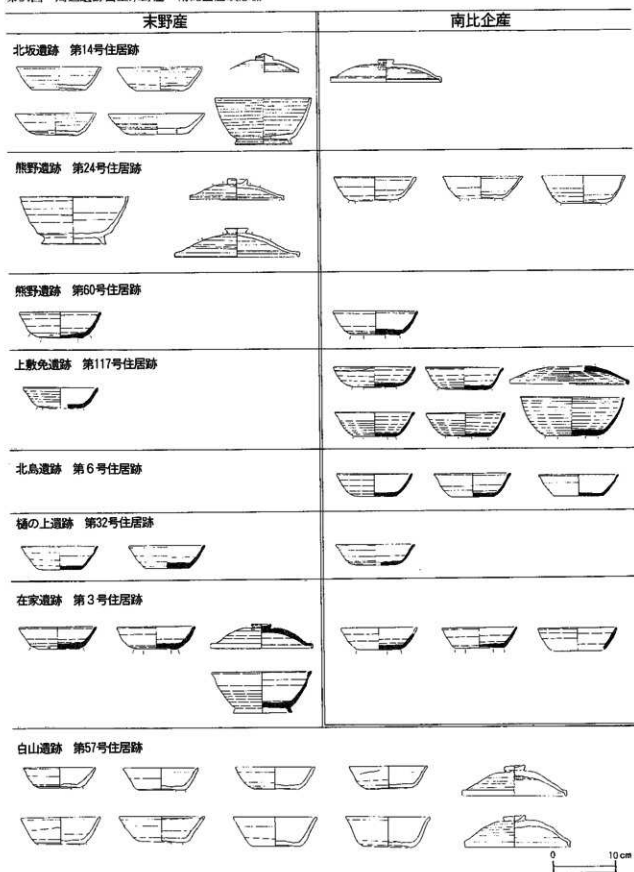
3 須恵器の供給について

在家遺跡3号住居跡からは南比企窯須恵器と末野産須恵器が共存していた。個体識別の結果、総個体数19点の内、末野産9点(47%)、南比企産10点(53%)となり、両者はほぼ拮抗する比率となっている。妻は1点のみで、大半は食器である。須恵器環は末野産5点、

南比企産9点と南比企産の割合が高いが、食器具のなかでみると、末野産8点、南比企産9点と両者はほぼ同率となる。

この状況が一般的な様相といえるのか否か、在家遺跡周辺地域の8世紀中葉～後半段階の遺跡を抽出して比較した(第23図)。対象遺跡は美里町北坂遺跡14号住、岡部町熊野遺跡24号住、同60号住、白山遺跡57号住、花園町台耕地遺跡73号住、深谷市上敷免遺跡119号住、熊谷市樋の上遺跡32号住、北島遺跡第4地点6号住と在家遺跡3号住である(註1)。これらは末野窯跡群に比較的近い荒川流域左岸、律令制下の那珂郡、榛沢郡、幡羅郡域に位置する諸遺跡である。この地域の須恵器は、主に末野窯跡群と南比企窯跡群からの供給で賄われて

第24図 周辺遺跡出土末野産・南比企産須恵器



おり、末野産と南比企産須恵器の供給比の検討ということになる。参考として第24図には対象遺跡の末野産、南比企産須恵器の食膳具を抽出して図示した。

巨視的に見れば、末野窯跡群から比較的遠距離にある上敷免、在家、北島遺跡では末野産須恵器よりも南比企産須恵器が卓越し、近距離にある北坂遺跡、古耕地遺跡、白山遺跡では末野産が優勢となる傾向は看取できる。

まず、最も末野窯跡群に近い北坂遺跡では、末野産須恵器が9割近くを占め、南比企産を圧倒している。末野産食膳具の占める比率が高く、全体の過半数を超えている。末野産須恵器環は口径13cm大が主体で、12cm大のものと15cmを超える扁平な環を含む。底部は回転糸切り後ヘラケズリ調整されるものと未調整のもの両者が存在する。また、鳥羽政之氏によって抽出された末野窯跡群に特徴的な内削ぎ状口縁をもつ高台碗(鳥羽1991)が作出する。

熊野遺跡は末野窯跡群の属するであろう榛沢郡の、郡衙を取り巻く集落と推定されている。24号住では環は南比企、高台碗とそれに伴う蓋は末野産となる。比率的には2:1の割合で南比企産が多い。一方、60号住では末野産77%に対して南比企産23%、南比企産1に対して末野産3.5となり比率は逆転する。須恵器環では口縁部個体数で1:2.5、破片数で1:2.7となり、末野産の占める比率が高い。24号住出土の南比企産須恵器は渡辺編年のHIV期、60号住のそれはHIII期~HIV期古段階に相当するものと考えられ、時期的に大きな隔たりはない。

グラフには示していないが、末野窯跡群膝下の地である寄居町平原遺跡では、8世紀後半の住居跡が3軒検出されている。1号住は須恵器が8点あり、7点は末野産で、南比企産は含まれない。環は全て底部再調整が施されている。2号住は14点中、末野産が11点、南比企産かと思われる甕が3点であった。末野産環は底部調整のあるものとなしもの両者が併存する。両住居跡ともほぼ末野産のみで構成されるといってよい。一方、3号住は総数21点中5点が末野産、15点が南比企産であ

った。末野産と南比企産の構成比は1:3となる。3号住出土の南比企産の須恵器は渡辺編年のHIII期段階と考えている。1・2号住と3号住の供給比の差を時期差の反映と見るべきか、検討の余地は多いが、いずれにせよ、熊野遺跡、平原遺跡に見られたように同一遺跡において、遺構単位で須恵器産地間の供給比に大きな差違が生じる点は注意を払う必要がある。

白山遺跡も実態としては熊野遺跡と同一集落である。57号住居跡は末野産が82%、南比企産8%と末野産が圧倒している。環についてみると22点中20点が末野産で、底部手持ちヘラケズリを施す一群と、回転糸切り後無調整のものがある。器形的にも浅身のものと、逆台形の深身の環の両者がある。いわゆる壺Gが相伴しており、酒井清治氏により、8世紀末葉の年代基準資料に用いられている(酒井1987)。9世紀に向けた末野窯跡群の増産期の象徴であろうか。

末野窯跡群の眼下に流れる荒川沿いの遺跡をみると、台耕地遺跡では末野産が56%、南比企産が22%、更に下流に位置する樋の上遺跡と在家遺跡は両窯跡群産がほぼ拮抗する比率を示す(註2)。末野窯跡群から最も距離的に遠い北島遺跡では、末野産11%に対し、南比企産が78%と南比企産が主体を占めている。樋の上、在家、北島遺跡の南比企産環は渡辺編年HIV期段階と思われる。

上敷免遺跡は利根川右岸の沖積地に位置する遺跡であるが、末野産7%、南比企産86%と南比企産が末野産を圧倒している。南比企産須恵器はHIV期段階と考えられる。

8世紀後半の須恵器生産と流通に関しては、南比企窯跡群産須恵器の汎武蔵国ともいえる圧倒的なシェアの拡大と、表裏一体である末野窯跡群の衰退に象徴されている。末野窯跡群は8世紀初頭段階の広域流通と生産量の増大から、8世紀第2四半期に操業停止ともいって減産に追い込まれること、8世紀第4四半期に至り増産に向かい、9世紀には再び活発な生産を再開するとされている(渡辺1995)。

8世紀中葉~後半段階はまさに末野窯跡群の須恵器

生産停滞期に相当する。窯跡群自体の生産実態が不明な現在、生産の実態を把握するには集落の分析以外にない。北坂遺跡、熊野遺跡60号住など、遺跡によってはかなりの量の末野産須恵器をもつ例が確認できたことは、減産期の末野産窯跡群の解明に繋がる手がかりになると思われる。荒川左岸地における末野産須恵器の主要供給地域を、少ない検討資料から類推すれば、北島遺跡、上敷免遺跡を結ぶライン以西に求めることができよう(註3)。

もう一つの問題は、末野産須恵器の主要供給地域である熊野遺跡、平原遺跡でみられた南比企産須恵器の卓越遺構の存在である。これを資料のバラツキと見て資料数を増加するなかで、平均化して把握するのも一法であるが、実はこのアンバランスさが減産期末野産須恵器の生産と供給の在り方を示している可能性もあろう。いずれにしても、従来不明確であった8世紀前半～後半の末野産須恵器の編年とそれに基づく実態把握が欠かせない。ここでは末野産須恵器自体の編年にはまったく触れられなかったが、抽出資料を瞥見すると器形や法量、調整技法など、明らかにいくつかのタイプに分類することができる。集落出土の資料を蓄積しつつ、末野産須恵器の分析と、供給実態の解明を進めていきたい。

註1 北坂遺跡14号住は埼玉県立さきたま資料館にて筆者実見。報告書記載+器+αを対象に個体識別した。熊野遺跡24号住は同部町教育委員会鳥羽政之氏のご協力でデータを提供していただいた。熊野遺跡60号住は本年度当事業団で整理予定。データは口縁部計測法による個体数であり、実際の個体数は更に上回るの確実である。なお、第24図の須恵器は参考資料として掲載した。また、台耕地遺跡は報告書のデータに基づいた。白山遺跡57号住居跡、上敷免遺跡117号住居跡、樋の上遺跡32号住居跡、北島遺跡第4地点6号住居跡、在家遺跡3号住居跡、平原遺跡1～3号住居跡については、破片資料も含めて個体識別を行った。

また、熊谷市三尻中学校遺跡12号住も8世紀後半の良好な資料であるが、データとして掲載できなかった。ご協力いただいた熊谷市教育委員会吉野健氏にお礼とともにお詫び申し上げます。

註2 中村倉司氏による、「下辻遺跡群(樋の上遺跡を含む)の分析でも8世紀後半の第Ⅱ期、Ⅳ期に末野産、南比企産はほぼ同数の比率を占めることが示されている(中村1987)。

註3 末野産須恵器の供給範囲自体は、更に東に広がり、加須市水深遺跡でも末野産と思われる高台輪がある。

引用・参考文献

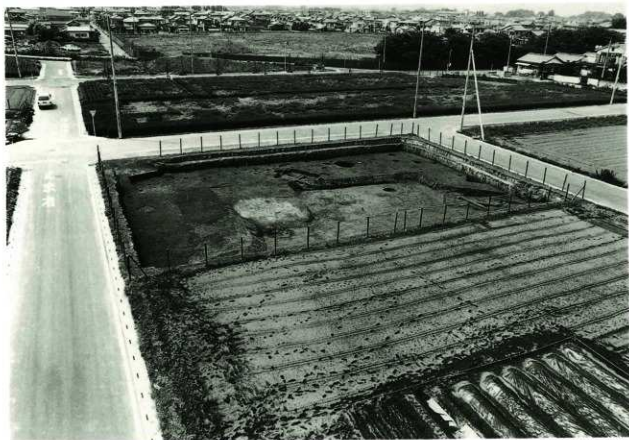
- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸』歴史時代編Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
- 浅野晴樹 1989 『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第81集
- 磯崎 一 1989 『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第85集
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸』古墳・歴史時代編Ⅰ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
- 今井 宏 1987 『3 まとめ』埼玉の古代窯業調査報告書 埼玉県立歴史資料館
- 岩瀬 譲 1995 『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第151集
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』国立歴史民族博物館研究報告 第40集
- 大谷 徹 1991 『北島遺跡』Ⅲ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第103集
- 小川良祐 1986 『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第59集
- 金子正之 1982 『三尻遺跡群 上辻遺跡・下辻遺跡』熊谷市教育委員会
- 金子正之 1984 『三尻遺跡群 上辻遺跡・下辻遺跡』熊谷市教育委員会
- 金子正之 1985 『三尻遺跡群 黒沢館跡・樋之上遺跡』熊谷市教育委員会
- 金子正之 1986 『三尻遺跡群 若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』熊谷市教育委員会

- 金子正之 1988 『熊谷市横間栗遺跡の調査(第2次)』『第21回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 金子正之 1989 『三尻遺跡群 杜表遺跡・杜裏北遺跡 杜裏南遺跡』熊谷市教育委員会
- 金子正之他1996 『熊谷市諏訪木遺跡の調査』『第29回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他主催
- 川口 潤 1989 『瓦屋敷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第82集
- 木戸春男 1995 『根結・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第153集
- 鯉持和夫 1993 『ウツギ内・砂田・柳町』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第126集
- 小久保敬他1983 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第23集
- 植田宣行 1992 『天神前遺跡』熊谷市教育委員会
- 埼玉県 1984 『埼玉県史 資料編3』
- 埼玉県立歴史資料館 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井清治 1984 『台耕地』II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 酒井清治 1987 『埼玉県の須恵器の変遷について』『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井清治 1995 『熊谷市西別府廃寺出土の瓦について』『王朝の考古学』
- 寺社下博 1982 『常光院東遺跡』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 1983 『めづか』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 1984 『天神下・土用ヶ谷戸遺跡』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 1987 『熊谷市境原裏遺跡の調査』『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 寺社下博・金子正之 1988 『天神遺跡』熊谷市教育委員会
- 高山清司 1976 『三ヶ尻上古遺跡』『埼玉県土器集成4』埼玉考古学会
- 瀧瀬芳之 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集
- 田中広明 1992 『新屋敷東・木郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
- 利根川章彦 1982 『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第9集
- 鳥羽政之・平田重之 1991 『新田遺跡』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第3集
- 鳥羽政之・平田重之 1997 『熊野遺跡発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第6集
- 中島 宏 1981 『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中村倉司 1987 『下辻遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第69集
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第17集
- 長岡孝志 1984 『三尻林(2)・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第34集
- 大和 修・鈴木仁子 1982 『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・猪久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第16集
- 吉野 健 1994 『西別府廃寺(第2次)』熊谷市教育委員会
- 渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群』II 鳩山窯跡群遺跡調査会
- 渡辺 一 1995 『武蔵国の須恵器生産の各段階』『王朝の考古学』

写真図版



遺跡全景(北東より)



遺跡全景(南東より)

遺跡全景(北東より)



遺跡全景(南西より)



遺跡全景(北西より)





第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡カマド



第1号住居跡カマド断面



第2号住居跡



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況

第3号住居跡遺物出土状況



第1号掘立柱建物跡



第1号井戸跡



住居跡出土遺物(1)



第1号住居跡 1



第1号住居跡 3



第1号住居跡 2



第1号住居跡 4



第1号住居跡 18



第3号住居跡 18



第1号住居跡 23



第1号住居跡 20

住居跡出土遺物(2)



第1号住居跡 7



第3号住居跡 7



第1号住居跡 9



第3号住居跡 8



第3号住居跡 6



第3号住居跡 9



第3号住居跡 13



第3号住居跡 14



第1号住居跡 24



第1号住居跡 6



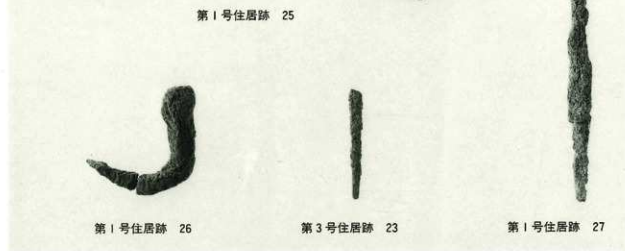
第1号住居跡 13



第1号住居跡 29



第1号住居跡 25



第1号住居跡 26

第3号住居跡 23

第1号住居跡 27

報告書抄録

ふりがな	ざいけいせき							
書名	在家遺跡							
副書名	フレッシュタウンかごはら関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第220集							
編著者名	富田和夫							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1						TEL 0493-39-3955	
発行年月日	西暦1998 (平成10) 年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (' ' ')	東経 (' ' ')	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ざいけいせき 在家遺跡	さいたま市熊谷市玉井 3丁目54番地	11202	95	36°10'3"	139°20'32"	19940401～ 19940531	848	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
在家遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡	3	土師器	黒書土器出土		
			掘立柱建物跡	2	須恵器			
			土壌	3	石製品 鉄製品			
		中世	掘立柱建物跡	3				
			井戸跡	2				
			ピット群	1				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第220集

熊谷市

在家遺跡

フレッシュタウンかごはら関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成10年7月24日 印刷

平成10年7月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷／誠美堂印刷株式会社